

## 八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み

—その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件—

松 森 晶 子

日本女子大学

**【要旨】** 本稿は、琉球八重山諸島の黒島方言に焦点を当てて、この方言のアクセントの仕組みを明らかにする試みを行う。まず本稿では、黒島方言には（一見したところ）原因不明なアクセントの型の交替が見られる、という事実の指摘から始め、このような交替の原因を明らかにするためには、これまで多良間島や池間島などのいくつかの宮古諸島の体系において、そのアクセント位置の算出に機能していることが分かっている「韻律語（音韻語）(PWd)」という韻律範疇を想定することが必要になることを論じる。あわせて本稿では、これまで二型アクセント体系として記述されてきた黒島方言は、実は3種類の型の対立を持つ三型アクセント体系であることも報告する。そして、どのような条件のもとでその3種類の型の区別が明瞭に出現するのかを予測・説明するためにも、やはり上述のPWdという韻律範疇の想定が不可欠であることを論じる\*。

**キーワード：**黒島、琉球語、韻律範疇、韻律語、三型アクセント体系

### 1. はじめに

従来「2つ以上のアクセント型の対立を持った体系は存在しない」、と考えられてきた1宮古諸島において、ごく最近になって「三型」アクセント体系の発見が相次いで成されている。松森（2010, 2014, 2016a）、五十嵐（2015）の多良間島方言、五十嵐ほか（2012）、Igarashi et al. (forthcoming) の西原方言（池間島方言の地域変種）、松森（2013, 2016a）の宮古島の与那覇方言、松森（2015）の宮古島の狩俣方言、などがそれに当たる。これら一連の研究によって、宮古諸島のアクセントの仕組みも徐々に解明されつつある。

なかでも重要な点は、これらの研究を通じ、宮古諸島のアクセント体系とその規則の記述のためには、「モーラ、音節、フット」といった、これまで知られてきた韻律範疇を想定するだけでは不十分で、それらより大きな韻律範疇の想定が必要と

\* 本稿は、2015年6月20日に大東文化大学において開催された日本言語学会第150回大会における、「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み—その韻律範疇と下がり目の出現条件—」と題する筆者の発表の内容を、論文にまとめたものである。草稿に目を通し、多くの有益なコメントを下された2名の査読者に感謝いたします。なお本研究は科研費補助金基盤研究(A) (課題番号22242011, 26244022)、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」、および「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の助成を受けている。

<sup>1</sup> 平山・大島・中本（1967）、平山（編著）（1983）、崎村（2006）などの研究が、その考え方を代表する。

なる、という見通しがあらたに提示されたことである。

本稿では、その見通しは（宮古諸島だけでなく）八重山諸島を含めた南琉球（宮古・八重山諸島）全般のアクセント記述研究のためにも有益であることを、八重山諸島の黒島方言を一例に取りながら論じる。また、そのアクセント体系や規則がこれまで多くの謎に包まれていた八重山諸島の諸方言について、その仕組みの本質を捉えて記述を行っていくための展望が開けてきたことも、あわせて論じたい。

さて、近年あらたに宮古諸島において機能していることが判明した韻律範疇は、2モーラ以上の形態素<sup>2</sup>を写像することによって作られる韻律上の単位である（五十嵐 2015, Igarashi et al. forthcoming）。

松森（2014）はその韻律単位を、宮古諸島に独自に発展した特殊な単位と捉え、それに「韻律領域（prosodic domain）」という名称を付けて、多良間島方言のアクセントの記述を行った。これに対し、松森・五十嵐（2014）、五十嵐（2015）、Igarashi et al. (forthcoming) は、多良間島で機能している当該のアクセント単位のことを、「韻律語（Prosodic word）」と呼んで議論した<sup>3</sup>。（さらに松森（2016a）では、それを「音韻語（Phonological word）」と呼び変えたが、両者の示す意味に違いはない。）本稿ではこの単位のことを、「韻律語（音韻語）」と呼び<sup>4</sup>、以下、略称でPWDと表記しながら論じていきたい<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> ただし、（たとえ2モーラ以上であっても）どのような形態素でもこの単位（後述する「韻律語」）を形成できるとは限らない。Igarashi et al. (forthcoming) は、池間島では語根（root）と接語（clitic）は韻律語を形成するが、接辞（affix）は韻律語を形成しない、という事実を指摘している。たとえば池間島では動詞に後続する接尾辞の -n（否定）、-rai（受動）、-tai（過去）や名詞に後続する接尾辞の -gama（指小辞）などは、独立した韻律語を形成することができない。（この事実は、2008年以降の五十嵐らの研究においてすでに認識され、五十嵐を中心にした研究グループの口頭発表などでも明らかにされている。）（多良間島方言をはじめとする）他の宮古諸島の諸方言や、八重山諸島の諸方言にも、同様なことが言える可能性が高い。この点は、今後の南琉球のアクセント記述研究上の重要な検討課題である。

<sup>3</sup> 世界の諸言語で従来からその存在が広く認められてきた特定の韻律範疇を指す「韻律語」という名称を用いることで、松森・五十嵐（2014）、五十嵐（2015）、Igarashi et al. (forthcoming) は、以下のような見解を暗に提示したことになる。すなわち、宮古諸島にあらたに見出された問題の韻律単位は、けっして宮古諸島だけに発展した特殊な単位ではなく、普遍的な韻律範疇のひとつである可能性がある、という見解である。

<sup>4</sup> これを「韻律語（音韻語）PWD」のひとつとして位置づけることにより、同じ韻律単位が報告されている世界の諸言語のさまざまな音韻現象の報告から得られた知見を、この地域の方言体系の音声・音韻現象の分析に取り入れて考察を深めていくことが可能になる。同時にこの単位に関連してこの南琉球地域で今後、得られるであろう知見を、他の同様な単位を持つ諸言語の研究者に向けて発信していくことも求められている。換言すれば、南琉球諸方言においてあらたに認められたこの韻律単位を韻律語（音韻語）として位置づけることは、理論的にも要請されている。筆者はこのような立場をとるため、ここでは「韻律語（音韻語）」という用語を使用して議論を行うこととした。

<sup>5</sup> 日本語アクセント研究の分野では、従来「韻律語」という用語は、本稿とは異なる意味で使われてきた。それは、おおよそ「アクセントの実現する範囲」というような意味で、東京方言では、ほぼ「文節」と一致する。本稿で提示する、宮古・八重山諸島で機能している韻律上の単位「韻律語（音韻語）」は、それとは異なる意味で使用されていることに注意が必要である。

さて、五十嵐 (2015) や松森・五十嵐 (2014), 松森 (2014, 2015) の記述では、2 モーラ以上の語根や助詞はひとつの PWd を形成できるのに対して、1 モーラの助詞はそれ自体では PWd を形成できない、という特徴を持つことが明らかにされている。そのため、たとえば 1 モーラの助詞は、その前に置かれた名詞、あるいは複合語の語根と融合してひとつの PWd を形成する。今、松森 (2015) を参照しながら、宮古諸島で PWd を構成できる要素の代表的なものを以下に挙げよう。(以下、韻律範疇 PWd をカッコで示し、( )<sub>PWd</sub> のように、その右下に PWd と記すことにする。)

- (1) 宮古諸島に想定される韻律範疇 PWd を構成する要素 (多良間島方言を例にして)
- a. 単純名詞ひとつ (sjutacu)<sub>PWd</sub> (ソテツ), (adan)<sub>PWd</sub> (アダン)
  - b. 単純名詞 + 1 モーラ助詞 (属格助詞の nu など)  
(adan nu)<sub>PWd</sub> (アダンの)
  - c. 複合語の語根 (前部要素, 後部要素) (adan)<sub>PWd</sub> (gii)<sub>PWd</sub> (アダン木)
  - d. 複合語の語根 (後部要素) + 1 モーラ助詞 (属格助詞の nu など)  
(adan)<sub>PWd</sub> (gii nu)<sub>PWd</sub> (アダン木の)
  - e. 2 モーラ以上の助詞 (kara)<sub>PWd</sub> (から)
  - f. 2 モーラ以上の助詞連続 (karadu)<sub>PWd</sub> (からづ)

本稿では、宮古諸島ではなく、同じ南琉球の八重山諸島に位置する黒島の方言に焦点を当て、宮古諸島で発見された上述の韻律範疇 PWd は、実はこの黒島方言のアクセントの仕組みを解明するためにも有効であることを示す<sup>6</sup>。

あわせて本稿では、従来二型アクセント体系として記述されてきた黒島方言は、実は三型アクセント体系を持つことも記述・報告する。その際、どのような条件でその3つの型の区別が明瞭に出現するのかを説明するためには、やはり PWd という韻律範疇の想定が不可欠であることも論じる。

## 2. 問題提起 (その1) 一黒島に3種の型の違いが出現する場合

平山・大島・中本 (1967) は、黒島のアクセント体系に「平板型」と「頭高型」という2種類の型の対立を認め、この方言が二型アクセント体系である、という記述・報告を行った。平山・大島・中本 (1967) によれば、その2種類の型のそれぞれの所属語彙は次のようである<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 本稿で扱うデータは、2014年3月、5月、9月、2015年3月の4回にわたって行われた、筆者の黒島のアクセント調査によって得られたものである。協力者はA氏(男、昭和8年生まれ)、B氏(男、昭和12年生まれ)の2名である。調査票として、松森(2000, 2012)によって提示された「系列別語彙」のリストをもとにして、それに新規にいくつかの語をあらたに付け加えて作成した語彙リストを使用した。

<sup>7</sup> これらの語彙を、松森(2000, 2012)によって提唱された「系列」の概念にしたがって分類すると、(2)の語のうち「平板型」に入る「牛、鼻、鳥」などはA系列、「網、花、腕、山」などはB系列に所属する語である。また「頭高型」に所属する「白、箸、婿、声、蔭」は、

## (2) 平山・大島・中本(1967)による黒島アクセントの記述

平板型の所属語彙：牛 ?uʃi, 網 ?an, 鼻 pana, 花 pana, 腕 ?udi, 山 jama,  
鳥 tur, 犬 ?in 等

頭高型の所属語彙：臼 ?uʃi, 箸 paʃi, 婿 muku, 声 kui, 蔭 hai 等

(平山・大島・中本 1967: 49-50)

これに対し本稿では、後述するような理由により、この方言が三型アクセント体系を持つことを報告する。そのため以下、黒島方言に認められるこの3つの型を、それぞれA型、B型、C型、と呼んで議論を進めることとする。

さて黒島方言では、1モーラの助詞は存在するが、1モーラの名詞は存在しない。東京方言の1モーラ名詞にあたる「手、湯、葉、木、田」などは、黒島では「tii (手), juu (湯), paa (葉), kii (木), taa (田)」のように2モーラとなる。つまりこの方言の名詞は、すべて2モーラ以上から成る。(ちなみに黒島方言には、haa (井戸), jaa (家), vaa (子供), maa (孫), waa (豚) など、1音節2モーラの名詞は数多く存在する。)

そこでまず、2モーラ名詞の示すアクセント型の分析から検討を始めよう。以下、本稿では、ピッチの急激な下降の位置に“]”を付けて示すこととする。なお、詳細は後述するが、この方言には、文節が高く始まる型と、それが低く始まり、文節全体にわたってその低いピッチが持続する型との対立が存在する。(今、高い音調を上線で、低い音調を下線で示すとすれば、この方言には、abu kinna (洞窟よりは) 対 funi kinna (舟よりは) のような対立がある。) その違いを明示するために、以下、前者の場合にのみ、その文節の開始部分に“[”の記号を付けて示し、後者の場合には、その文節の開始部分に何も記号を付さないこととする。

まず2モーラ名詞を単独で発話すると、次のような型が出現する(以下、語を単独で発話した際に出現する型のことを「単独形」と呼ぶこととする)。(ちなみに、この例からはA型とB型の区別は明瞭にはならないのだが、後述する環境で両者には明瞭な型の区別が出現するので、ここではA型とB型を区別して示している)。

## (3) 黒島方言のアクセント型の出現—単独形

A型：[fuʃi (臼) [haa (井戸) [mizji (水) [sudi (袖) [pana (鼻)

B型：[jaa (家) [tii (手) [ava (油) [jama (山) [mami (豆)

C型：funi (舟) hami (甕) usji (臼) macji (松) nabi (鍋)<sup>8</sup>

すべてC系列に相当する。したがってこの方言の系列別体系は、(一見したところ) AB/C のように見える。つまり、平山・大島・中本(1967)の記述にしたがえば、黒島方言では、AB系列は「平板型」、C系列は「頭高型」で出現する、ということになる。

<sup>8</sup> このC型は、(少なくとも筆者の調査した2名の話者の発音では) まれに [fu]ni (舟), [ha]mi (甕), [na]bi (鍋) のように、その第1モーラ直後にピッチの下がり目が出る型で出現することがあった。C型の単独形がどちらで出現するかは語彙的に指定されているのではなく、同じ名詞がどちらの型でも出現し得る。したがってこれは、C型の2モーラ名詞単独形の持つもうひとつの型と考えなければならない。(ちなみに(2)の平山・大島・中本(1967)の

A型とB型には、[fucji (口), [jaa (家)のように、高く始まり単語全体にわたってピッチが高い型が出現する。したがってA型とB型は、この条件では中和することになる。これに対しC型には、funi (舟), hami (甕), usji (臼), macji (松)のように低いピッチが持続するような型が出現する。

次に2モーラ名詞に助詞を付けた場合を見てみよう。黒島方言では、2モーラの名詞に主格助詞 nu や対格助詞 ju を付けた場合にも、単独形の場合と同じくA型とB型が中和する<sup>9</sup>。(4)の例は、2モーラ名詞に主格助詞の nu を後続させ、「～が見える ~nu mii, ～がいる ~nu bun」という文の中で発話した場合の、最初の文節部分のアクセント型を示している。

(4) 黒島方言のアクセント型の出現—主格助詞 nu を後続させた場合の文節部分の型<sup>10</sup>

[A型]	[haa nu (井戸が)	[vaa nu (子供が)	[tun nu (鳥が)	[mun nu (森・丘が) <sup>11</sup>
	[mizji nu (水が)	[pana nu (鼻が)	[paku nu (箱が)	[tuzji nu (妻が)
[B型]	[jaa nu (家が)	[tii nu (手が)	[un nu (芋が)	[ava nu (油が)
	[jama nu (山が)	[mami nu (豆が)	[pana nu (花が)	[taku nu (蛸が)
[C型]	[maa] nu (孫が)	[waa] nu (豚が)	[basa] nu (芭蕉が)	[funi] nu (舟が)
	[macji] nu (松が)	[maja] nu (猫が)	[nabi] nu (鍋が)	[usji] nu (臼が)

記述が、このC型を「頭高型」と名付けたのは、おそらくこの単独形の [fu]ni (舟) のような型の出現に特に重きを置いて記述したためではないかと推測される。

<sup>9</sup> A型とB型はどちらも、原則的に [haa nu (井戸が), [jaa nu (家が)のように、文節の出だしのモーラから高く始まるような型を持つ。しかし、特にその文節が2音節以上から成る名詞から始まる場合に、pa[na nu (鼻が), ja[ma nu (山が)のように、その上がり目を2モーラ目に遅らせて実現させることも多かった。本稿では、このようなピッチ上昇の遅れは音声レベルの現象と捉え、その音韻表記には反映しない方針とした。

<sup>10</sup> これに対しこの黒島方言では、nudu (主格助詞 nu + 焦点標識 du) を後続させると、C型の名詞から始まる文節の助詞連続の部分に下がり目が出現し、その結果、次のようにA/BCのような中和の仕方を示す傾向が見られる。

[A型]	[haa nudu (井戸がゾ)	[mun nudu (森・丘がゾ)	[fucji nudu (口がゾ)
	[izu nudu (魚がゾ)	[pana nudu (鼻がゾ)	[mizji nudu (水がゾ)
[B型]	[jaa nu]du (家がゾ)	[tii nu]du (手がゾ)	[ava nu]du (油がゾ)
	[jama nu]du (山がゾ)	[mami nu]du (豆がゾ)	
[C型]	[basa nu]du (芭蕉がゾ)	[funi nu]du (舟がゾ)	[hami nu]du (甕がゾ)
	[macji nu]du (松がゾ)	[nabi nu]du (鍋がゾ)	[usji nu]du (臼がゾ)

この場合、C型名詞がなぜ(名詞内部ではなく)助詞連続 nuduの部分に下がり目を生じさせるのか、ということの理由は、今のところ不明である。しかしこの事実は、内的再建によってもこの方言の三型アクセント体系を明らかにすることができる可能性を示唆している。(主格の nu や対格の ju が後続した場合には、) AB/Cのような中和を示すことが(4)、(5)などに挙げられた例から分かっているからである。)しかし(少なくとも筆者の調査協力者2名の発話では)、この nudu が後続する場合に出現するB型の下がり目は、常に明瞭に現れるとは限らず、B型がA型と同じような平板型で出現することもあった。この点については今後、さらに調査・確認の必要がある。

<sup>11</sup> 本稿で扱う例の中で「鳥、丘・森、湿地、海、椀」などの語の基底形は、それぞれ /tur/ (鳥),

(3) の例で見た単独形の場合と同様、このような条件下においても A 型と B 型は中和してしまい、両者とも同じ音調型で出現する。

同じような中和現象は、対格の助詞 *ju* が名詞に後続した場合にも見られる。(5) の例は、2 モーラ名詞に対格助詞の *ju* を後続させ、「～を見た *-ju mittan*」という文の中で発話した場合の、最初の文節部分のアクセント型を示している。この場合にも A 型と B 型は中和するが、C 型の名詞から始まる文節は A 型、B 型のそれとは異なる型で現れていることが分かる。

(5) 黒島方言の型の出現—対格助詞 *ju* を後続させた場合の文節部分の型

[A 型]	[haa ju (井戸を)]	[juu ju (湯を)]	[abu ju (洞窟を)]	[paku ju (箱を)]
[B 型]	[kii ju (木を)]	[tii ju (手を)]	[taa ju (田を)]	[jama ju (山を)]
[C 型]	[funi] ju (舟を)	[nabi] ju (鍋を)	[usji] ju (臼を)	

(4) でも (5) でも、A 型と B 型の名詞から始まる文節は、高く始まり、文節全体にわたってその高いピッチが持続する型となる。これに対して C 型名詞から始まる文節では、当該の名詞の語末モーラに下がり目が出現している。

これまでの記述研究がこの黒島方言を二型アクセント体系である、と捉えてきた理由は、(3) で見たような単独形や、(4)、(5) で見たような 1 モーラの助詞が名詞に後続した場合のアクセント型のみを観察にもとづいて、その記述を行っていたためではないかと推測される。このような場合、黒島方言では A 型と B 型が中和してしまい、その結果、2 種類の型の区別しか観察することができないからである。

しかしながらこの黒島方言には、A 型と B 型との区別がはっきりと出現し、その結果、3 種類のアクセント型の違いが現れる場合がある。その 3 種類の型の区別が安定して出現する典型的な環境は、2 モーラ名詞に *kinna* (～よりは)、*haradu* (～からゾ)、*naadu* (～でゾ) など、全体が 3 モーラとなる助詞連続を後続させた場合である。

以下の例は、それを示す。(6a) の例は、2 モーラ名詞に比格助詞の主題形 *kinna* (よりは) を付け、「～よりは大きい *-kinna ubukuda*」という文の中で発話してもらった場合、(6b) の例は、2 モーラ名詞に奪格助詞の *hara* と焦点標識の *du* を付け、「～からゾ戻ってきた *-haradu mudurikee*, ～からゾ出した *-haradu nzjasjita*」という文

---

/mur/ (丘・森), /sjicur/ (湿地), /tumar/ (海), /mahar/ (椀) のように、語末に /r/ を持つ形だと考えられる。この語末の子音 /r/ は、表層では [n] となって出現することも多い (例: mur 丘 (単独形), mun nudu 丘がゾ, mun nu 丘の, mun naadu 丘でゾ, mur haradu 丘からゾ, mur kinna 丘よりは, sjicur 湿地 (単独形), sjicun nu 湿地の, sjicun naadu 湿地でゾ, sjicur kinna 湿地よりも, tuman 海 (単独形), tuman nudu 海がゾ, tuman nu 海の, tuman kinna 海よりは, tumar haradu 海からゾ)。特に後続の助詞が /n/ から始まる場合に tun (鳥), mun (丘・森), sjicun (湿地), tuman (海), mahan (椀) のように [n] で終わる形式が出現しやすいという傾向は見られたものの、[r] と [n] のどちらが出現するかは厳密な音条件の違いによって予測することはできない。たとえば tuman haradu ~ tumar haradu (海からゾ) のように、[r] と [n] がまったく同じ条件のもとにどちらも出現することがある。したがってここでは、この [r] と [n] は自由変異の関係にある /r/ の異音である、と考えておくこととする。

の中で発話してもらった場合（これらの例の中では、haradu が heradu になったり、abu（洞窟）が abo となったりしているが、この音交替については注 13 を参照されたい）、(6c) の例は、2 モーラ名詞に所格助詞の naa と焦点標識の du を付け、「～でゾ会った ~naadu auta, ～でゾ話した ~naadu panasjita」という文の中で発話してもらった場合の、それぞれ最初の文節部分のアクセント型を示している。このような条件のもとでは、A / B / C の 3 種類の明瞭な型の区別が現れている。

### (6) 黒島方言の三種類のアクセント型

#### a. 比格助詞 kinna が後続した場合の文節部分の型

[A 型]	[haa kinna (井戸よりは)	[abu kinna (洞窟よりは)
	[maki kinna (牧場よりは)	[jeki kinna (駅よりは)
[B 型]	[jaa kin]na (家よりは)	[taa kin]na (田よりは)
	[fumu kin]na (雲よりは)	[jama kin]na (山よりは)
[C 型]	funi kinna (舟よりは)	nabi kinna (鍋よりは)
	usji kinna (臼よりは)	tuman kinna (海よりは) <sup>12</sup>

#### b. 奪格助詞 hara + 焦点標識 du が後続した場合の文節部分の型<sup>13</sup>

[A 型]	[haa haradu (井戸からゾ)	[juu haradu (湯からゾ)
	[abo haradu (洞窟からゾ)	[fucji heradu (口からゾ)
	[pana haradu (鼻からゾ)	[sude haradu (袖からゾ)
[B 型]	[jaa hara]du (家からゾ)	[tii hara]du (手からゾ)
	[an hara]du (網からゾ)	[min hara]du (耳からゾ)
	[bata hara]du (腹からゾ)	[jama hara]du (山からゾ)

<sup>12</sup> 語末が重音節で終わる tuman (海) や mahan (椀) (その基底形はそれぞれ /tumar/、/mahar/ と考えられる；注 11 参照) は、(全体として 3 モーラなのにもかかわらず) 3 モーラ名詞の pataki (畑) や minaha (庭) などと同じアクセント型(参考:[mina]ha kinna 庭よりは,[mina]ha haradu 庭からゾ,[mina]ha naadu 庭でゾ)ではなく、2 モーラ名詞の funi (舟) などと同じ型(参考:funi kinna 庭よりは,funi karadu 舟からゾ,funi naadu 舟でゾ)で出現する。なお、これらの語の単独形も、funi (舟) などと同じく低平調の tuman (海)、mahan (椀) となり、C 型の [pata]ki (畑)、[mina]ha (庭) などと同じ×[tuma]n (海)、×[maha]n (椀) のような型とはならない。語末が重音節で終わる他の C 型の 3 モーラ名詞にも同じことが言える。すなわち funin (蜜柑)、tarai (盥) などの名詞は、(全体の長さは 3 モーラであるにもかかわらず) それに 2 モーラ以上の助詞が後続すると、funin sjidu (蜜柑でゾ)、tarai haradu (盥からゾ) のように、文節全体が低平型になる。つまり語末が重音節で終わる 3 モーラ名詞は、あたかも 2 モーラ名詞の funi (舟) や nabi (鍋) などと同じような韻律上の振る舞いをするのである。本稿ではこの現象を、重音節で終わる名詞はすべて末尾のモーラが「韻律外的 (extrametrical)」となる、と考えることによって説明しておく。今、韻律外的要素を□で囲んで示すとすると、funin (蜜柑)、maha□ (椀)、tuma□ (海)、tara□ (盥) のようになるが、これらの要素は、黒島方言のアクセント位置算出の際には、あたかも存在しないかのように振る舞っている。紙幅の制約上、黒島方言における韻律外的要素の出現の詳細については、稿をあらためて論じたい。

<sup>13</sup> 黒島には、子音 /h/ を超えて母音が融合する (ローレンス 2000) 傾向が見られる。その母音融合を誘発させる典型的な助詞は、向格・与格の助詞 ha である。この助詞は sudi (袖)、

[C型]	fune	heradu (舟からゾ)	hame	haradu (甕からゾ)
	nabe	haradu (鍋からゾ)	usji	heradu (臼からゾ)
	tuman	haradu (海からゾ)	mahan	haradu (椀からゾ)

## c. 所格助詞 naa + 焦点標識 du が後続した場合の文節部分の型

[A型]	[haa naadu (井戸でゾ)	[pii naadu (リーフでゾ)	[mun naadu (森・丘でゾ)
	[basu naadu (バスでゾ)	[micji naadu (道でゾ)	[jeki naadu (駅でゾ)
[B型]	[jaa naa]du (家でゾ)	[taa naa]du (田でゾ)	[jama naa]du (山でゾ)
[C型]	funi naadu (舟でゾ)	tuman naadu (海でゾ)	

したがってこの黒島方言は、三型アクセント体系を持っていることが明らかになった。

(3) の 2 モーラ名詞の単独形や、(4) や (5) のようにそれらの名詞に主格助詞の nu や対格助詞の ju を後続させた文節では、A 型と B 型が中和する。このような条件のもとでは、たしかに平山・大島・中本 (1967) の記述した通り、A 型と B 型は同じアクセント型で出現する。しかし (6) に示したように、名詞に後続する助詞連続が全体として 3 モーラ の長さになると、A 型と B 型は常に異なる型で現れ、A 型から始まる文節には、[abu kinna (洞窟よりは) のように高い平坦な音調型が出現するのに対して、B 型から始まる文節には、[jama kin]na (山よりは) のように

funi (舟), nabi (鍋), maki (牧場), paku (箱), misu (味噌), pucu (臍), ubusu (海水) など、狭母音を語末に持つ名詞に後続すると、sude he (袖に), sude hedu (袖にゾ), fune he (舟に), fune hedu (舟にゾ), nabe he (鍋に), nabe hedu (鍋へゾ), make hedu (牧場へゾ), pako ho (箱に), pako hodu (箱にゾ), miso ho (味噌に), miso hodu (味噌にゾ), pucu hodu (臍にゾ), ubuso hodu (海水へゾ) といったように、直前の母音を半狭母音に変化させるとともに、ha 自らの母音も半狭母音になる。(その際、直前の母音が非円唇母音の場合は he となり、円唇母音の場合は ho となる。) 一方、直前の母音が狭母音以外の環境では、この助詞は ha のまま出現する (jaa 家, jaa ha 家へ, jaa hadu 家へゾ, haa 井戸, haa ha 井戸へ, haa hadu 井戸へゾ, maja 猫, maja ha 猫に, jama 山, jama ha 山へ, jama hadu 山へゾ, pana 鼻, pana ha 鼻に, pana hadu 鼻にゾ, toora 台所, toora ha 台所へ, toora hadu 台所へゾ, an 網, an ha 網に, an hadu 網にゾ, min 耳, min ha 耳に, min hadu 耳にゾ, tin 空, tin hadu 空へゾ, mur 丘, mur hadu 丘へゾ, mahan 椀, mahan ha 椀に, mahan hadu 椀にゾ, tuman 海, tuman ha 海へ, tuman hadu 海へゾ)。ただしこの融合は、pii (リーフ), zji (土), tii (手), juu (湯), のように、たとえ語末母音が狭母音でも、それが長母音の場合には起こらない (pii ha リーフへ, zji ha 土へゾ, tii hadu 手へゾ, juu hadu 湯へゾ)。さらに、fucji (口), micji (道), usji (臼), mizji (水) など、語末のモーラが cji, sji, zji などの場合には、fucji hedu (口へゾ), micji hedu (道へゾ), usji hedu (臼へゾ), mizji hedu (水へゾ) のように、助詞自体は he に変化するものの、名詞の語末母音のほうは、半狭母音へと変化を遂げないようだ。

同様な現象は、本稿の (6b) や (7b) に例として挙げられた奪格の hara にも観察される (pataki 畑, patake hera 畑から, patake heradu 畑からゾ, funi 舟, fune heradu 舟からゾ, nabi 鍋, nabe heradu 鍋からゾ, paku 箱, pako hora 箱から, abu 洞窟, abo hora 洞窟から)。ただし ha と違って hara の場合は、(少なくとも筆者の調査した 2 名の話者の発音では) 名詞の語末母音は半狭母音に変化させるものの、その助詞自体は hara のままとどまることも多かった (pucu 臍, pucu hara 臍から, pucu haradu 臍からゾ, abu 洞窟, abo haradu 洞窟からゾ, sudi 袖, sude hara 袖から, sude haradu 袖からゾ, nabi 鍋, nabe hara 鍋から, nabe haradu 鍋からゾ, ubusu 海水, ubusu haradu 海水からゾ, funi 舟, fune haradu 舟からゾ, hami 甕, hame haradu 甕からゾ)。ha と hara で、どうしてこのような違いが生じるのかは不明である。今後の記述上の課題としたい。



助詞連続の部分に下がり目が実現するのである。

それでは、助詞が2モーラの場合はどうだろうか。(7a)は、比格助詞の kin を2モーラ名詞に後続させ、「～より大きい ~kin ubukuda」という文の中で発話してもらった場合、(7b)は、2モーラ名詞に奪格助詞の hara を後続させ、「～から出した ~hara nzjasjita, ～から出た ~hara nzjita, ～から来た ~hara ken」などという文の中で発話してもらった場合の、文節部分のアクセント型を示す。助詞 kin が後続した場合にはA型とB型が中和して2種類の型しか観察されないのに対して、hara の場合には3種類の型の区別が出現する。

### (7) 黒島方言の三種類のアクセント型—2モーラの助詞が後続した場合

#### a. 比格助詞 kin が後続した場合の文節部分の型

[A型]	[fucji kin (口より)]	[abu kin (洞窟より)]
	[maki kin (牧場より)]	[micji kin (道より)]
[B型]	[jaa kin (家より)] <sup>14</sup>	[tii kin (手より)]
	[an kin (網より)]	[min kin (耳より)]
[C型]	funi kin (舟より)	nabi kin (鍋より)
	usji kin (白より)	tuman kin (海より)

#### b. 奪格助詞 hara が後続した場合の文節部分の型

[A型]	[haa hara (井戸から)]	[juu hara (湯から)]
	[muru hara (森・丘から)]	[fucji hera (口から)]
	[puco hara (臍から)]	[sude hara (袖から)]
[B型]	[miso ho]ra (味噌から) <sup>15</sup>	[bata ha]ra (腹から)]
	[taa ha]ra (田から)]	[jama ha]ra (山から)]

<sup>14</sup> この比格の助詞 kin が後続した場合のB型名詞から始まる文節が、[jaa kin (家より)]のような型を示し、×[jaa] kin, あるいは×[jaa ki]nのような型とならない理由は、現在のところ不明である。注12で述べた韻律外的要素と何らかの関係がある可能性がある(kinという助詞の最後のモーラは韻律外的要素であり、そのためこの助詞は2モーラでありながらも、韻律上は1モーラの助詞として振る舞うのではないかと考えられる)。しかしながら、C型名詞に後続した場合は、このkinという助詞は通常の2モーラ助詞と同様の振る舞いをしていく。(このことは、funi kin (舟より), nabi kin (鍋より)などが低平型で出現していることから分かる。)したがってこの2モーラ助詞 kin の振る舞いについては、さらなる検討と考察が必要である。

<sup>15</sup> この2モーラ助詞 hara の第1モーラに下がり目が出現することは、後述する(26)の「H音調は2モーラ以上にわたって実現しなければならない」というH音調の出現制約が、ここには適用していないことを示している。2モーラの助詞はひとつの韻律語を形成できるので、たとえばB型の「山」から始まる文節「山から」は、(jama) PwA (hara) PwAのような韻律構造を持つことになる。2つ目のPWdである(hara) PwAは全体として2モーラから成るため、もし(26)に従うとすれば、そこにH音調は実現できないはずで、代わりにデフォルトのL音調がその助詞部分に実現し、×[jama] hara (山から)のような型の出現が期待される。どのような原因によってこのような例外が生じるかについて考察することは、今後の課題としなければならない。

[C 型]	fune	hera (舟から)	hame	hara (甕から)
	nabe	hara (鍋から)	usji	hera (臼から)
	tuman	hara (海から)	mahan	hara (椀から)

このように2モーラの助詞が後続した場合については、3種類の型の対立が出現しない場合と、出現する場合とがあるが、この違いがどのような原因によって生じるかについては、現時点では不明とせざるをえない。

このようにこの黒島方言においては、後続する助詞が2モーラの場合には、2モーラ名詞の持つ3種類の型の区別は、常に出現するとは限らない。しかし(6)で見たように、その助詞連続を全体として3モーラの長さにしてやると、この方言の3種類の型の区別は、常に明瞭に出現することが、これまでの調査で明らかになっている。

それでは、いったいなぜ、単独形や1モーラの助詞が後続した場合にはA型とB型の名詞の型が中和してしまうのに、助詞連続が全体として3モーラになると、B型の助詞連続の部分に明瞭な下がり目が出現し、その結果、明瞭な三型アクセント体系が明らかになるのだろうか。これは黒島のアクセント記述研究上のひとつの課題である。

### 3. 問題提起 (その2) 一黒島のC型名詞の型の交替

ところで、(3)、(6)、(7)の例において特に興味をひかれるのは、C型の名詞から始まる文節の示す型である。ここには、低く開始して文節全体にわたってその低いピッチが持続する型(以下、これを「低平型」と呼ぶ)が現れている。そこで、このC型の2モーラ名詞の示す音調型に着目してみると、ここまでの例から、このC型の名詞は、それに助詞が後続するか否か、また後続する助詞の長さが何モーラか、というような条件の違いに応じて、興味深い型の交替の様相を見せていることが分かる。

まず(4)や(5)の例から、C型の2モーラ名詞は、主格のnuや対格のjuなどの1モーラ助詞を後続させた文節内では、[funi] nu (舟が)、[usji] ju (臼を)のように、その名詞の語末モーラに下がり目を出現させていることが分かる。ところが、それに続く助詞や助詞連続が全体として2モーラ以上になると、なぜかfuni kin (舟より)、fune hera (舟から)、funi kinna (舟よりは)、fune haradu (舟からゾ)のように、文節全体が低平型となってしまう((6)、(7)のC型の例を参照)。さらに、助詞を後続させず、当該の名詞を単独で発音すると、やはりfuni (舟)、nabi (鍋)のような低平型となる((3)のC型の例を参照)。このC型の音調型の交替について、funi (舟)を例にとってまとめると、次のようになる。

#### (8) 黒島方言のC型の型の交替 (2モーラ名詞の場合)

[単独形]	[後続の助詞が1モーラの場合]	[後続の助詞・助詞連続が2・3モーラの場合]
funi (舟) ~	[funi] nu (舟が)	~ funi kinna (舟よりは)

特にこのC型の2モーラ名詞は, [funi] nu (舟が) 対 funi kinna (舟よりは) のように, 後続する助詞の長さに応じて, その文節内にピッチの下がり目が出現したり, 出現しなかったり, というような, 不思議な型の交替の様相を見せる点が注目される。このような音調型の交替は, いったい何が原因となって生じるのだろうか。

黒島方言のアクセントについて, さらに注目に値すると思われるのは, C型の3モーラ以上の名詞の示す音調型の交替の様相である。本節では以下, この方言のC型名詞の示す型の交替に的を絞って, その名詞にさまざまな長さの助詞連続を後続させた場合のアクセント型の交替の様子を観察してみることにする。

前節では, 黒島方言のC型の2モーラ名詞は, 出現する条件の違いによって, 当該の名詞の語末モーラに下がり目が出現したり, 低平型で出現したりすることを見てきた。次の(9)の例は, それらをまとめて示したものである。

(9) 黒島方言のC型のアクセント交替 (2モーラ名詞の場合)

a. 名詞の語末モーラに下がり目が生じる場合

[usji] nu (臼が)      [funi] nu (舟が)      [nabi] nu (鍋が)  
[usji] ju (臼を)      [funi] ju (舟を)      [nabi] ju (鍋を)

b. 全体が「低平型」になる場合

単独形: usji (臼)      funi (舟)      nabi (鍋)

2モーラ以上の助詞が後続する場合:

usji kin (臼より)	funi kin (舟より)	nabi kin (鍋より)
usji hera (臼から)	fune hera (舟から)	nabe hara (鍋から)
usji kinna (臼よりは)	funi kinna (舟よりは)	nabi kinna (鍋よりは)
usji heradu (臼からゾ)	fune heradu (舟からゾ)	nabe haradu (鍋からゾ)

これに対し, 同じC型に属す3モーラの長さを持つ名詞から始まる文節は, これとは違ったタイプの型の交替の様相を見せる。

ところで, 3モーラの名詞になると, (C型は, 他の2つの型とは異なる型で出現するものの) A型とB型の型の区別はあまり明瞭ではなくなるようであり, (少なくとも筆者が調査した2名の話者の発話文では) それぞれがA型とB型のどちらの型に属すかを, はっきりと判別することはできなかった。したがって以下の例では, これを単に「AB型」とだけ示し, C型のアクセント型に的を絞って見ていくことにしよう。以下の(10)~(13)の例では, 各例の→の付されたC型の名詞の示す下降の位置に, 特に着目しながら検討してほしい。

さて, C型の3モーラ名詞から始まる文節は, 2モーラ名詞とは違って, けっして低平型になることはなく, 何モーラの助詞が後続しようとも, その名詞から始まる文節内部にかならず下がり目が出現する。まず, 単独で発音する場合, AB型には [haara (川)], [toora (台所)] のように高く始まって文節全体が高い型が出現するのに対して, C型は [pata]ki (舟), [mina]ha (庭) のように, 各語の語末から数えて2つ目のモーラ (以下, これを「次末モーラ」と呼ぶ) 直後に下がり目を生じさ

せる<sup>16</sup>。

(10) 黒島方言の3モーラ名詞の型—単独形

[AB型]	[haara (川)]	[kuusu (唐辛子)]	[toora (台所)]	[sjicuru (湿地)]
→ [C型]	[uu]ki (桶)	[mina]ha (庭)	[pata]ki (畑)	[ada]ni (アダン)
	[api]ra (アヒル)	[pi]si]da (山羊)	[saba]ni (くり舟)	

次に、これらの3モーラ名詞に1モーラ助詞を付けた場合について検討しよう。(11a)の例は、3モーラ名詞に主格助詞の nu を付けて「～が見える、いる」という文の中で発話してもらった場合、(11b)の例は、その名詞に対格助詞の ju を付けて「～を見た」という文の中で発話してもらった場合の、文節部分のアクセント型を示している。

(11) 黒島方言の3モーラ名詞の型—1モーラ助詞を名詞に後続させた文の中で

a. 主格助詞 nu が後続した場合の文節部分の型

[AB型]	[haara nu (川が <sup>g</sup> )	[toora nu (台所が <sup>g</sup> )	[mma nu (馬が <sup>g</sup> )
	[sjicuru nu (湿地が <sup>g</sup> )	[jarabu nu (テリハボクが <sup>g</sup> )	
→ [C型]	[pataki] nu (畑が <sup>g</sup> )	[minaha] nu (庭が <sup>g</sup> )	[jakuba] nu (役場が <sup>g</sup> )
	[uuki] nu (桶が <sup>g</sup> )	[auda] nu (モッコが <sup>g</sup> )	[ubusu] nu (海水が <sup>g</sup> )
	[apira] nu (アヒルが <sup>g</sup> )	[pi]si]da nu (山羊が <sup>g</sup> )	[usagi] nu (兎が <sup>g</sup> )

b. 対格助詞 ju が後続した場合の文節部分の型

[AB型]	[haara ju (川を)	[toora ju (台所を)	[sjicuru ju (湿地を)
→ [C型]	[pataki] ju (畑を)	[minaha] ju (庭を)	[sabani] ju (くり舟を)
	[jakuba] ju (役場を)	[auda] ju (モッコを)	[uuki] ju (桶を)

ここで注目してほしいのは、C型の3モーラ名詞に出現する下がり目の位置の交替である。(10)の単独形の場合には、下がり目は名詞の次末モーラに出現している。しかし(11)のように、名詞に主格の nu や対格の ju などの1モーラ助詞が後続する場合は、その下がり目は当該の名詞の語末モーラに現れるのである。

ところが、後続させる助詞や助詞連続が2モーラ以上になると、C型の3モーラ名詞に出現するピッチの下がり目の位置は、その名詞の語末モーラではなく、その次末モーラに出現する。

まず後続する助詞が2モーラの場合について、(12)で検討してみよう。(12a)は、

<sup>16</sup> C型のアクセント型は、平山・大島・中本(1967: 49-50)では「頭高型」と名付けられている((2)参照)。しかし同じC型の3モーラ名詞では、その下がり目の位置はその語頭に出現することはない。それらは、単独形では [pata]ki (畑), [mina]ha (庭) のように、その次末モーラに下がり目を出現させる。また、それらに1モーラ助詞が後続した場合には、その下がり目の位置は [pataki] nu (畑が<sup>g</sup>~), [minaha] nu (庭が<sup>g</sup>~) のように、当該の名詞の語末のモーラに出現する。(後述するが、このC型の下がり目の位置は、原則的に文節の1つ目のPWdの次末モーラに置かれる。)したがってこの黒島方言のC型を「頭高型」という名称で呼ぶことは、適切とは言えない。

「～より大きい」という文の中で発話してもらった場合, (12b) は, 「～から出した, ～から出た, ～から来た」などという文の中で発話してもらった場合の, 文節部分のアクセント型を示す。C型の3モーラ名詞に出現する下がり目の位置は, 当該の名詞の語末ではなく, その次末モーラにあることを確認してほしい。

(12) 黒島方言の3モーラ名詞の型—2モーラの助詞を名詞に後続させた文の中で

a. 比格助詞 kin が後続した場合の文節部分の型

- [AB型] [haara kin (川より)            [toora kin (台所より)            [sjicuru kin (湿地より)  
→[C型] [pata]ki kin (畑より)            [saba]ni kin (くり舟より)            [ubu]ja kin (母屋より)  
          [au]da kin (モッコより)            [uu]ki kin (桶より)

b. 奪格助詞 hara が後続した場合の文節部分の型

- [AB型] [haara hara (川から)            [toora hara (台所から)            [sjicuru hara (湿地から)  
→[C型] [pata]ke hera (畑から)            [mina]ha hara (庭から)            [saba]ne hara (くり舟から)  
          [ubu]ja hara (母屋から)            [au]da hara (モッコから)            [uu]ke hera (桶から)

後続する助詞連続が全体として3モーラになった場合も同様である。次の(13)の例は, 「～よりは大きい」「～からゾ戻ってきた, ～からゾ出した」などという文の中で発話してもらった場合の, 文節部分の型である。

(13) 黒島方言の3モーラ名詞の型—全体が3モーラになる助詞連続を名詞に後続させた文の中で

a. 比格助詞 kinna が後続した場合の文節部分の型

- [AB型] [haara    kinna (川よりは)            [makiba    kinna (牧場よりは)  
          [toora    kinna (台所よりは)            [sjicuru    kinna (湿地よりは)  
→[C型] [pata]ki    kinna (畑よりは)            [mina]ha    kinna (庭よりは)  
          [saba]ni    kinna (くり舟よりは)            [ubu]ja    kinna (母屋よりは)  
          [au]da    kinna (モッコよりは)            [uu]ki    kinna (桶よりは)

b. 奪格助詞 hara + 焦点標識 du が後続した場合の文節部分の型

- [AB型] [haara    haradu (川からゾ)            [macjija    haradu (店からゾ)  
          [toora    haradu (台所からゾ)            [sjicuru    haradu (湿地からゾ)  
→[C型] [pata]ke    heradu (畑からゾ)            [mina]ha    haradu (庭からゾ)  
          [au]da    haradu (モッコからゾ)            [uu]ke    haradu (桶からゾ)

この場合もC型の3モーラ名詞の下がり目は, 当該の名詞の次末モーラに出現する。

つまりC型の3モーラ名詞は, 次の(14)にまとめられるような型の交替の様相を示している。

## (14) 黒島方言のC型のアクセント交替(3モーラ名詞の場合)

## a. 名詞の語末モーラに下がり目が出現する場合

[pataki] nu (畑が<sup>s</sup>)      [minaha] nu (庭が<sup>s</sup>)      [uuki] nu (桶が<sup>s</sup>)  
 [pataki] ju (畑を)      [minaha] ju (庭を)      [sabani] ju (くり舟を)

## b. 名詞の次末モーラに下がり目が出現する場合

単独形: [pata]ki (畑)      [mina]ha (庭)      [uu]ki (桶)

2モーラ以上の助詞が後続する場合:

[pata]ki kin (畑より)      [ubu]ja kin (母屋より)      [au]da kin (モッコより)  
 [pata]ke hera (畑から)      [mina]ha hara (庭から)      [uu]ke hara (桶から)  
 [pata]ki kinna (畑よりは)      [ubu]ja kinna (母屋よりは)      [saba]ni kinna (くり舟よりは)  
 [pata]ke heradu (畑からゾ)      [mina]ha haradu (庭からゾ)      [uu]ke haradu (桶からゾ)

後続する助詞が1モーラ<sup>17</sup>のnuやjuの場合には、C型の3モーラ名詞の下がり目の位置は、[pataki] nu (畑が<sup>s</sup>)のように当該の名詞の語末モーラに出現する((14a)参照)。これに対し、その名詞の単独形((10)の例を参照)や、それに後続する助詞が2モーラや3モーラの場合((12), (13)の例を参照)には、[pata]ki (畑), [pata]ke hera (畑から), [pata]ki kinna (畑よりは)のように、その下がり目の位置は、

<sup>17</sup> 興味深いことに、向格・与格の助詞haは、(1モーラ助詞であるにもかかわらず)他の1モーラ助詞とは異なる韻律上の振る舞いをする。以下の例は、「～へ行く ~ha parun, ~へ行つた ~ha getta, ~に入れる ~ha iritan, ~にやる(食わせる) ~ha waasun」等の文の中で発音してもらった場合の音調型である。ここでは、特にC型のアクセントに注目してほしい。

[A型]	[haa ha (井戸へ)	[abo ho (洞窟へ)	[pako ho (箱へ)
	[sude he (袖へ)	[puso ho (人に)	[usji he (牛に)
[B型]	[jaa] ha (家へ)	[an] ha (網へ)	[jama] ha (山へ)
[C型]	nabe he (鍋へ)	waa ha (豚に)	maa ha (孫に)

もし1モーラ助詞haが、(nabi nu)<sup>PWd</sup>(鍋が<sup>s</sup>)のnuの場合と同様に、前の名詞と同じPWdに属すとすれば、×[nabe] he (鍋へ), ×[waa] ha (豚に)のような型が期待されるのだが、実際はそうにはなっていない。このことを説明するには、この助詞haは(1モーラであるにもかかわらず)例外的に、直前の名詞とは融合せずに、(nabe)<sup>PWd</sup>(he)<sup>PWd</sup>(鍋へ)のようにそれひとつで名詞とは独立したPWdを形成することができる、と考えなければならぬ。3モーラ名詞にこれが付加した場合にも、同様なことが言える。以下は、紙面の関係上、C型の例のみ載せる。

[pata]ke he (畑へ)	[saba]ne he (くり舟へ)	[au]da ha (モッコへ)
[uu]ke he (桶へ)	[ubu]so ho (海水へ)	[api]ra ha (アヒルに)
[gara]sa ha (鳥に)	[pisji]da ha (山羊に)	[usa]ge he (兎に)

これらが×[patake] he(畑へ), ×[apira] ha(アヒルに)のような下がり目の位置を示していない、ということは、この向格のhaが、(patake)<sup>PWd</sup>(he)<sup>PWd</sup>(畑へ)のように、単独でPWdを形成していることを示している。つまりこの助詞haは、他の1モーラ助詞とは異なり、(1モーラであるにもかかわらず)あたかも2モーラ以上の助詞であるかのような振る舞いをしてるのである。このようなhaの韻律上の振る舞いの特殊性の背後には、何らかの通時的な理由があるのではないかと思われるが、この点に関する考察と議論は、稿をあらためて行うこととしたい。

当該の名詞の次末モーラになる（(14b) 参照）。

以上、2モーラと3モーラのC型名詞の示す型の交替現象について概観してきたが、これらをまとめると以下ようになる。

#### (15) 黒島方言のC型のアクセント交替

[単独形] [後続の助詞が1モーラの場合] [後続の助詞・助詞連続が2・3モーラの場合]

[2モーラ名詞] funi (舟) ~ [funi] nu (舟が) ~ funi kinna (舟よりは)

[3モーラ名詞] [pata]ki (畑) ~ [pataki] nu (畑が) ~ [pata]ki kinna (畑よりは)

C型の2モーラ名詞は、それに助詞が後続するか否か、またその助詞が1モーラか2モーラ以上か、という条件に応じて、その語末に下がり目が出現したり、しなかったり（低平型となったり）する。これに対し同じC型の3モーラ名詞は、決して低平型となることはなく、それに助詞が後続するかどうか、また後続する助詞が1モーラか2モーラ以上かによって、その下がり目の位置が異なってくるのである。

一見したところ不可解にも見える、このようなC型名詞の交替現象は、いったい何が原因となって生じるのであろうか。黒島方言のアクセント記述研究は、このような疑問に対して解答を与えられるようなものでなければならない。

### 4. 黒島アクセントの仕組みを考える

#### 4.1. 宮古諸島の体系で機能するPWd—多良間島を例にして

さて、前節までに問題提起した黒島方言の型の交替の原因は、第1節で導入した韻律範疇PWdを想定することによって解明されることを、以下、本節では論じたい。

その前に、宮古諸島の韻律単位PWdと、そのアクセント体系の仕組みについて、ここで簡単に見ていくことにしよう。以下は、宮古諸島の三型アクセント体系の代表として、多良間島のアクセントを取り上げて検討する。（多良間島方言のアクセント交替現象の詳細については、五十嵐2015を参照されたい。）

多良間島では、2モーラ以上の助詞が名詞に後続すると、次のように、明瞭な三型アクセント体系が出現する（松森2010）。以下は、名詞にとりたての助詞maiを後続させ、「～もある ~mai aL」のような文の中で観察した場合に出現する、3種のアクセント型の例を示している。

#### (16) 多良間島方言の三型アクセント—助詞mai（～も）が付加した場合の型

A型	[kadi mai (風も)	[gama mai (洞窟も)	[jaroo mai (テリハボクも)
B型	[jama ma]i (山も)	[mami ma]i (豆も)	[mm ma]i (サツマイモも)
C型	[fu]ni mai (舟も)	[ti]da mai (太陽も)	[ada]n mai (アダンも)

このようなアクセント型の出現を説明するために松森（2014）は、前述の（1）で見たような韻律範疇を想定して、次の（17）、（18）のような規則が多良間島のアクセントを支配していることを論じた。（ここでは、松森（2014）の「韻律領域」

という用語を、PWd で置き換えている。)

(17) 多良間島方言のアクセント規則 (1)

A 型：文節全体を通して、アクセントを置かない。

B 型：文節内部に存在する 2 つ目の PWd にアクセントを置く。

C 型：文節内部に存在する 1 つ目の PWd にアクセントを置く。

また、高い音調は、次のような規則によってそれぞれの PWd に実現する。(以下、本稿では、高い音調のことを「H 音調」、低い音調のことを「L 音調」と記すこととする。)

(18) 多良間島方言のアクセント規則 (2) —H 音調の実現位置を決める規則<sup>18</sup>

H 音調は、各 PWd の次末モーラに結びついて実現する。

(多良間島の韻律を正しく予測するには、これらに付け加えて、H 音調の結びついたモーラの前に出現するモーラをすべて高くし、そのモーラの後ろに出現するモーラをすべて低くするための規則が必要であるが、紙面の制約上、本稿ではこれらについては触れない。)

さて、第 1 節ですでに述べたように、宮古諸島の PWd は、2 モーラ以上の語根や助詞を写像することによって作られる韻律単位である (五十嵐 2015, 松森 2015, Igarashi et al. forthcoming)。この単位はあくまで「2 モーラ以上」の要素によ

<sup>18</sup> これまでの多良間島の記述研究では、この方言のアクセントは、H 音調から L 音調へのピッチの下がり目の位置に実現する、と考えられてきた。たとえば松森 (2014) や五十嵐 (2015) の多良間島のアクセントの記述では、「各文節を H 音調で開始し、アクセントの置かれたモーラの直後に下降を実現させる」ための規則が想定されている。しかしながら最近の記述研究 (松森 2016b) によれば多良間島方言では、かならずしもすべての文節が H 音調から開始されるとは限らず、またそのアクセントも常にピッチの「下がり目」として実現するとは限らない、ということが明らかになりつつある。たとえば、「昨日も海水甕を運んでいた」という文は {kinu'u mai} |upu'sjugami u| {katami'i} |butaL| (ここでは、アクセントの置かれた位置をアポストロフィー “'” で示している。また、{|} は文節を表す) といういくつかの文節から成り、その最初の 3 つの文節が、それぞれアクセントを 1 つずつ持っている。このような場合には、kinu'u mai upu'sjugami u katami'ibutaL (ここでは上線は H 音調を、下線は L 音調を示している) のような韻律が、その文全体にわたって実現する。この場合、文頭の文節 {kinu'u mai} は、確かに高いピッチで開始し、そのアクセントの位置でピッチが下降するものの、それに続く 2 つ目の文節 |upu'sju+gami u| は、低いピッチで開始し、そのアクセントの位置でピッチが上昇する。おそらくこの多良間島方言には、文頭から数えて奇数番目のアクセントは H 音調を L 音調に変え、偶数番目のアクセントは L 音調を H 音調に変える、といったような、興味深い韻律の仕組みが存在すると思われる。(このような事実を捉えるために松森 (2016b) は、「各イントネーション句を H 音調で開始し、アクセントを持つモーラの位置で、隣とは反対の音調に変えよ」という規則を、多良間島の体系に想定して暫定的な説明を試みている。) いずれにせよ、多良間島の韻律の仕組みを包括的に分析・説明するためには、これまでの記述研究のように文節レベルの観察にとどまっていたのでは不十分であり、それより上位のレベル (文レベル) における韻律の観察も、合わせて行うことが不可欠である。したがって、本稿で提示した多良間島の一連の韻律規則も、今後の記述研究の進展に応じて、将来、修正を施さねばなくなる可能性がある。



て構成されるものであるため、主格や属格の助詞 *nu* などの1モーラの助詞は、それひとつでは独立した PWd を形成できない。そのため、それらは次の (19a) のように、前の名詞とまとまることで、ひとつの PWd を形成する。これに対し、2モーラ以上の助詞・助詞連続は、(19b) に見られるように、それ自体で名詞とは独立した PWd を形成できる。

(19) 多良間島方言の「舟が」「舟の」「舟も」「舟から」における PWd の形成

- a. ( funi nu )<sub>PWd</sub> (舟が) ( funi nu )<sub>PWd</sub> (舟の)  
 b. ( funi )<sub>PWd</sub> ( mai )<sub>PWd</sub> (舟も) ( funi )<sub>PWd</sub> ( kara )<sub>PWd</sub> (舟から)

松森 (2014) は、このような PWd の形成の仕方を想定することによって、たとえば次の多良間島の C 型のアクセントの下がり目の位置を正しく予測することができることを論じている。

(20) 多良間島方言の C 型のアクセント交替の例

- [ada]n (アダン; 単独形) [ada]n mai (アダンも)  
 [adan] nu naL (アダンの実) [adan] nu naL mai (アダンの実も)

C 型の下がり目の位置は、まず文節内部の1つ目の PWd にアクセント置き ((17) 参照)、さらにその PWd の次末モーラに H 音調を実現させる ((18) 参照)、という規則によって決定する。(20) では、[ada]n mai (アダンも) と [adan] nu naL (アダンの実) という場合でその下がり目の位置が異なっていることが分かるが、それは両者が、次の (21) のような PWd の形成の仕方をしているからである。

(21) [ada]n mai (アダンも) と [adan] nu (アダンの) の韻律構造の違い

- a. (adan)<sub>PWd</sub> (mai)<sub>PWd</sub> (アダンも)  
 b. (adan nu)<sub>PWd</sub> (アダンの)

[ada]n mai (アダンも) の場合、(adan)<sub>PWd</sub> (mai)<sub>PWd</sub> のように、名詞と2モーラ助詞 *mai* が、それぞれ独立した PWd を形成している ((21a) 参照)。そのため、1つ目の PWd の次末モーラにアクセントが置かれると、[ada]n のように、下がり目は名詞の次末モーラに現れることになる。

これに対し、[adan] nu (アダンの) の場合は、属格助詞の *nu* が (1モーラなので) それひとつで独立した PWd を形成せず、前の名詞と融合して (adan nu)<sub>PWd</sub> のような PWd を形成する ((21b) 参照)。その PWd の次末モーラにアクセントが置かれると、[adan] nu のように、下がり目は当該の名詞の語末モーラに出現することになる。

#### 4.2. 黒島方言の体系で機能する PWd—その韻律規則

本節では、黒島方言にも、上述の宮古諸島の多良間島と同様な、2モーラ以上の語根や助詞を写像することによって作られる韻律的な単位 PWd が存在する、とい

うことを提案したい。

まず、黒島方言の1モーラの助詞 nu (が) や ju (を) は、(上述の多良間島の場合と同様) (funi nu)<sub>PWd</sub> (舟が), (nabi ju)<sub>PWd</sub> (鍋を) のように、前の名詞と融合してひとつのPWdを形成する。これに対して全体として2モーラ以上の助詞や助詞連続、たとえば hara (から) や kinna (よりは) は、(fune)<sub>PWd</sub> (hera)<sub>PWd</sub> (舟から), (nabi)<sub>PWd</sub> (kinna)<sub>PWd</sub> (鍋よりは) のように、前の名詞とは独立したPWdを形成する。このような黒島のPWd形成の仕方の違いを、C型の名詞「舟」と「畑」を例にとって示せば、次のようになる。

(22) 黒島方言の「舟が」「舟を」「畑が」「畑を」「舟から」「舟よりは」「畑から」「畑よりは」におけるPWdの形成の仕方

- a. (funi nu)<sub>PWd</sub> (舟が) (funi ju)<sub>PWd</sub> (舟を)  
 (pataki nu)<sub>PWd</sub> (畑が) (pataki ju)<sub>PWd</sub> (畑を)
- b. (fune)<sub>PWd</sub> (hera)<sub>PWd</sub> (舟から) (funi)<sub>PWd</sub> (kinna)<sub>PWd</sub> (舟よりは)  
 (patake)<sub>PWd</sub> (hera)<sub>PWd</sub> (畑から) (pataki)<sub>PWd</sub> (kinna)<sub>PWd</sub> (畑よりは)

本稿では、黒島には次のような韻律規則が存在することを提案する。

(23) 黒島方言の韻律規則 (その1)

- a. A型は、文節内のどのPWdにもアクセントが付与されない。  
 b. B型は文節の2つ目のPWdに、C型は文節の1つ目のPWdにアクセントを付与せよ。  
 c. アクセントは、各PWdの次末モーラに置け。

さらにB型とC型のピッチの下がり目の位置を予測するために、次のような規則をたてる。

(24) 黒島方言の韻律規則 (その2)

アクセントの置かれたモーラに、H音調を結びつけよ。

またアクセントと結びついて実現するH音調のほかに、黒島方言では次のような規則によって、A型とB型から始まる文節全体がH音調で開始することになると想定する。

(25) 黒島方言の韻律規則 (その3)

- a. A型は、文節内のすべてのPWdにH音調を付与せよ。  
 b. B型は、文節内の1つ目のPWdにH音調を付与せよ。

しかしながら、すでに見てきたように、H音調がアクセントと結びつくことが許されない場合が、この黒島方言には存在する。それは、典型的には本稿の(3)、(6)、(7)の例で見たような、C型の名詞から開始する文節内の最初のPWdが2モーラ以下の場合である。この場合、funi (舟), funi kinna (舟よりは), fune hera (舟

から)のように、文節全体が低平型となる。つまり、黒島方言のピッチの下がり目が出現する条件は、アクセントの付与された PWd が、全体として 3 モーラ以上から構成されることにある。本稿ではこの傾向を、黒島方言には次のような(多良間島方言には見られない)特徴がある、と提案することによって説明したい。

#### (26) 黒島方言における H 音調の出現制約

H 音調は、原則的に<sup>19</sup>2 モーラ以上にわたって実現しなければならない。

つまり黒島方言には、原則的に 1 モーラだけに実現する H 音調は許容されない、ということになる。この結果、アクセントと結びつくことがなかった H 音調は、どのモーラにも実現せずに音調の層で浮遊し、浮遊 H 音調になる、と考えておこう。

また、H 音調をアクセントが置かれたモーラ以外のモーラにも拡張させるための韻律規則 (27a)、および、アクセントの置かれたモーラ以降に出現する L 音調や、(26) の H 音調の出現制約に抵触してしまったために H 音調が実現できなかった PWd 内に現れる L 音調を予測するための韻律規則 (27b) を、この方言に想定しておくこととする。

#### (27) 黒島方言の韻律規則 (その 4)

- a. H 音調の付与された各 PWd 内の、H 音調の結びついたアクセントより左の(アクセントがなければその PWd 内のすべての)モーラにその H 音調を結びつけよ。(H 音調拡張規則)
- b. H 音調の結びついていないモーラを L 音調とせよ。(デフォルト L 音調付与規則)

以上の韻律規則と、(26) の H 音調の出現制約によって、まず B 型の 2 モーラ名詞から始まる文節「山よりは」と「山が」の韻律がどのように導き出されるか、検討しよう。これらはそれぞれ、次のような PWd の形成を遂げているものと考えられる。

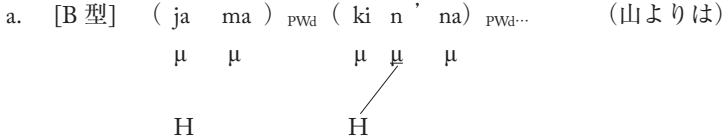
- (28) 山よりは 山が  
 ( jama )<sub>PWd</sub> ( kinna )<sub>PWd</sub> ( jama nu )<sub>PWd</sub>

B 型の名詞から始まる文節内では、2 つ目の PWd の次末モーラにアクセントが置かれることになっている ((23b, c) 参照)。そのため、(jama)<sub>PWd</sub> (kinna)<sub>PWd</sub> のような韻律構造の場合、その 2 つ目の PWd である (kinna)<sub>PWd</sub> の次末モーラにア

<sup>19</sup> ここで「原則的に」という但し書きを付けているのは、たとえば、注 8 や、注 15 で述べたような例外の存在が、黒島方言には確認されているからである。C 型 2 モーラ名詞の単独形が [fũ]ni (舟), [ha]mi (甕), [na]bi (鍋) のように第 1 モーラ直後にピッチの下がり目が出る型で出現する場合があることや、B 型の 2 つ目の PWd を形成する助詞 hara が、[jama ha]ra (山から) のようにその助詞の第 1 モーラに H 音調を実現させることなどを考慮に入れると、この制約は常に厳密に適用するとは言えないことになる。このような例外がどのような条件のもとに生じるのかは、今後の記述上の課題としなければならない。

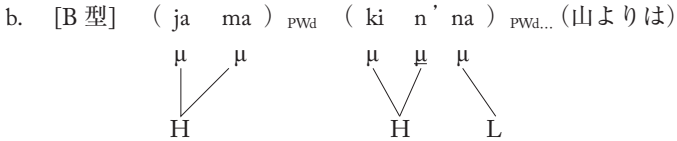
アクセントが置かれる。(以下の図では、アクセントの置かれたモーラの右上にアポストロフィー (') を、またアクセントを持つモーラにはその記号 ( $\mu$ ) に下線を付けて示すことにする。) そのアクセントの置かれたモーラに、(24) の規則によって H 音調が結びつき、さらに (25b) によって、H 音調が1つ目の PWd に付与されれば、(29a) のような韻律構造ができる。

(29) 黒島方言の B 型のアクセント—2 モーラ以上の助詞連続が後続した場合



さらに H 音調拡張規則 (27a) とデフォルト L 音調挿入規則 (27b) によって、次に図示されるような韻律構造が得られる。

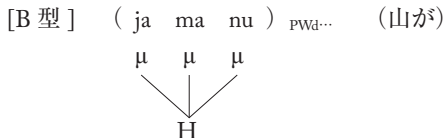
(29) 黒島方言の B 型のアクセント—2 モーラ以上の助詞連続が後続した場合



このようにして、最終的に [jama kin]na のような型が実現する。

これに対し、「山が」の場合は、(jama nu)<sub>PWd</sub> のような韻律構造を持っている。そこには、そもそも2つ目の PWd が存在しないため、この構造にはどこにもアクセントが与えられない。この構造には、(25b) によって1つ目の PWd に付与された H 音調が、(27a) の H 音調拡張規則によって当該の文節内部の各モーラに結びつくことにより、次のように、その文節全体にわたって高いピッチが実現する型となる。

(30) 黒島方言の B 型のアクセント—1 モーラの助詞が後続した場合



### 4.3. 黒島の C 型の交替現象を解明する

さてそれでは、上述の韻律規則と H 音調の出現制約 (26) によって、第3節で詳しく見てきたような、C 型の示すアクセント交替の原因究明を試みてみよう。まず、(8) で見たような、2モーラ名詞の示すアクセント交替について検討してみることとする。以下には、(8) を再度、提示する。

## (8) 黒島方言の C 型の型の交替 (2 モーラ名詞の場合)

[単独形] [後続の助詞が1モーラの場合] [後続の助詞・助詞連続が2・3モーラの場合]  
 funi (舟) ~ [funi] nu (舟が) ~ funi kinna (舟よりは)

本稿では、(8) に提示されているような後続する助詞の長さによる型の交替は、その韻律構造の違いから生じた、という提案を行う。つまり (8) の C 型名詞の示す型の交替は、「舟が」、「舟 (単独形)」、「舟よりは」に、それぞれ異なるタイプの PWd 形成の仕方を想定することによって説明するのである。

C 型の「舟 (単独形)」、「舟が」、「舟よりは」は、それぞれ次のような PWd を持っている想定される。

- (31) a. 舟 (単独形) (funi) <sub>PWd</sub>  
 b. 舟が (funi nu) <sub>PWd</sub>  
 c. 舟よりは (funi) <sub>PWd</sub> (kinna) <sub>PWd</sub>

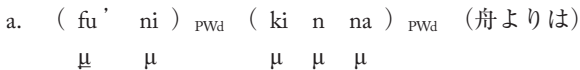
C 型の名詞から始まる文節は、その 1 つ目の PWd の次末モーラにアクセントが置かれる ((23b, c) 参照)。(funi nu) <sub>PWd</sub> の場合、その PWd 内の次末モーラにアクセントが置かれ、そこに (24) の規則が適用すると、次の (32a) に示されるように、H 音調は funi という名詞の語末のモーラ (ni の部分) と結びつくことになる。そこに H 音調拡張規則 (27a) とデフォルト L 音調付与規則 (27b) が適用すると、(32b) のようになり、最終的に [funi] nu … のような型が実現する。

## (32) 黒島方言の C 型 2 モーラ名詞のアクセント—1 モーラの助詞が後続した場合



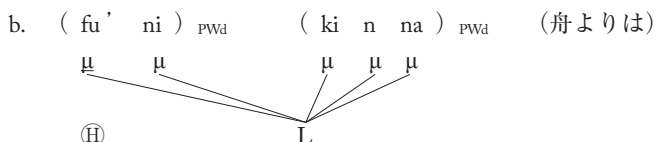
これに対し (funi) <sub>PWd</sub> (kinna) <sub>PWd</sub> の場合には、次の (33) に示されたような韻律構造が想定される。この構造では、1 つ目の PWd の構成要素のアクセントの置かれたモーラが funi の語頭の 1 モーラ (fu の部分) であるために、H 音調の出現制約 (26) に抵触してしまう。この場合、H 音調は、1 つ目の PWd にあるアクセントの置かれたモーラと結びつくことができず、浮遊してしまう (この浮遊した H 音調を、以下、Ⓔで示すこととする。)

## (33) 黒島方言の C 型 2 モーラ名詞のアクセント—3 モーラの助詞連続が後続した場合



このような場合、この浮遊 H 音調は、音声レベルではどこにも出現しないことになる。最終的に、(27b) の規則により文節内のすべてのモーラにデフォルトの L 音調が付与され、次のように文節全体が低平型となって出現する。

(33) 黒島方言の C 型 2 モーラ名詞のアクセント—2 モーラ以上の助詞連続が後続した場合



これと同様なことが、「舟」の単独形についてもいえる。

第 4.1 節で検討した多良間島方言とは異なり、黒島方言には「低平型」という、低く開始し、文節全体にわたってその低いピッチが持続するような型が観察されるが、これはこの黒島方言に、(26) のような H 音調の出現制約があるからであると捉えることによって説明される。

以上検討してきたように、2 モーラ以上の語根や助詞をもとに作られる韻律的な単位 PWd を想定することによって、funi (舟) ~ [funi] nu (舟が) ~ funi kinna (舟よりは) のような、C 型の 2 モーラ名詞の示す型の交替が説明される。

次に、(15) で見た C 型の 3 モーラ名詞の示すピッチの下がり目の位置の交替について、検討してみよう。以下には、(15) を再度載せる。

(15) 黒島方言の C 型のアクセント交替

[単独形] [後続の助詞が 1 モーラの場合] [後続の助詞・助詞連続が 2・3 モーラの場合]

[2 モーラ名詞] funi (舟) ~ [funi] nu (舟が) ~ funi kinna (舟よりは)

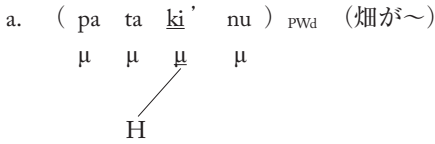
[3 モーラ名詞] [pata]ki (畑) ~ [pataki] nu (畑が) ~ [pata]ki kinna (畑よりは)

C 型の 3 モーラ名詞から始まる文節「畑 (単独形)」、「畑が」、「畑よりは」は、それぞれ次のような PWd の形成を遂げていると考えられる。

- (34) a. 畑 (単独形) ( pataki )<sub>PWd</sub>  
 b. 畑が ( pataki nu )<sub>PWd</sub>  
 c. 畑よりは ( pataki )<sub>PWd</sub> ( kinna )<sub>PWd</sub>

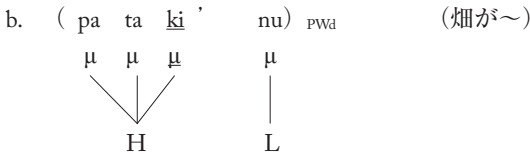
C 型から始まる文節は、その 1 つ目の PWd の次末モーラにアクセントが置かれることになっている ((23b, c) の規則参照)。したがって (pataki nu)<sub>PWd</sub> の場合、最初の PWd 内の次末モーラ、すなわち pataki の語末モーラ (ki の部分) にアクセントが置かれる。さらに (24) によってそのアクセントの置かれたモーラに H 音調が結びつくと、次の (35a) に示されたような韻律構造となる。

(35) 黒島方言の C 型 3 モーラ名詞のアクセント—1 モーラの助詞が後続した場合



さらに (27a, b) によって H 音調が拡張され, デフォルト L 音調が付与されれば, 最終的にこの構造には, H 音調と L 音調が次のように付与されることになる。

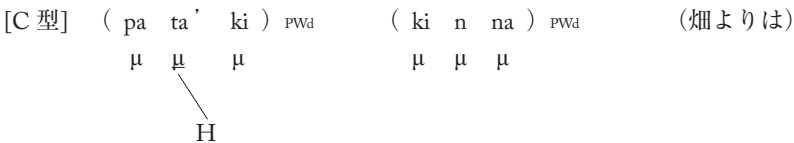
(35) 黒島方言の C 型 3 モーラ名詞のアクセント—1 モーラの助詞が後続した場合



このようにして, [pataki] nu のような型が実現し, その結果, ピッチの下がり目はその名詞の語末モーラに現れることになる。

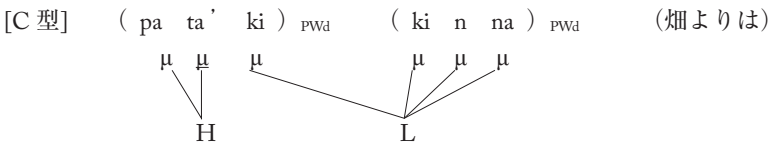
これに対して, (pataki)<sub>PWd</sub> (kinna)<sub>PWd</sub> の場合, その 1 つ目の PWd を構成する要素は (pataki)<sub>PWd</sub> なので, その次末モーラにアクセントが付与されると, 次のようになる。

(36) a. 黒島方言の C 型 3 モーラ名詞のアクセント—3 モーラの助詞連続が後続した場合



この構造に, (27a) によって H 音調が拡張し, (27b) によってデフォルトの L 音調が付与すると, 次のような韻律構造が得られる。

(36) b. 黒島方言の C 型 3 モーラ名詞のアクセント—3 モーラの助詞連続が後続した場合



このようにして, ピッチの下がり目は [pata]ki kinna (畑よりは) のように, 当該の名詞の次末モーラに実現することとなる。(同様なことは, [pata]ki (畑) の単独形についても言える。)

以上のように考えることで、なぜC型の3モーラ名詞が [pata]ki (畑) ~ [pataki] nu (畑が) ~ [pata]ki kinna (畑よりは) のように、その下がり目の位置の交替を示すのか、ということについての解答を得ることができる。

## 5. まとめ

前節では、八重山諸島の黒島方言に韻律範疇 PWd が存在すると想定し、それによってこの方言の（一見したところ不可解に見える）型の交替の原因の説明を試みた。C型の2モーラ名詞から始まる文節の場合には、[funi] nu (舟が) ~ funi kinna (舟よりは) のように、後続する助詞の長さに応じてそのピッチの下がり目が出現したり、しなかったりするのだが、ここには両者のPWdの形成の仕方の違いがかかっている。名詞に1モーラの助詞が後続した [funi] nu (舟が) の場合は、(funi nu)<sup>PWd</sup> (舟が) のような韻律構造を持っているのに対し、同じ名詞に2モーラ以上の助詞や助詞連続が後続した場合は、(funi)<sup>PWd</sup> (kinna)<sup>PWd</sup> (舟よりは) のような韻律構造を持っているからである。後者の場合、(26)のH音調の出現制約に抵触してしまうために、その名詞内部に下がり目が生じることができず、その結果、文節全体が低平調となって出現すると考えた。

さらに、C型の3モーラ名詞から始まる文節では [pataki] nu (畑が) ~ [pata]ki kinna (畑よりは) のように、後続する助詞の長さに応じてピッチの下がり目の位置が変動する。この現象も、前者が (pataki nu)<sup>PWd</sup>、後者が (pataki)<sup>PWd</sup> (kinna)<sup>PWd</sup> のようなPWdの形成の仕方を遂げている、と考えることによって説明した。

以上、黒島方言には（一見）その原因が不明のように思える型の交替現象が観察されているが、松森 (2014, 2015, 2016a)、五十嵐 (2015)、Igarashi et al. (forthcoming) などによって宮古諸島に認められている韻律範疇をこの黒島方言の体系にも想定することによって、その交替の原因が解明できることを論じてきた。つまり、宮古諸島の方言のいくつかに認められている韻律範疇PWdは、八重山諸島の黒島方言のアクセントの出現を正しく予測するためにも有効である、ということになる。

また本稿は、黒島方言が、従来記述されているような「二型アクセント体系」ではなく、「三型アクセント体系」であることを示した。そして、その3つの型の区別が明瞭に出現するのは、2モーラ名詞に全体が3モーラとなる助詞連続が付加した、次のような場合であることも示した。

### (37) 黒島方言の三種類の型の実現

[A型]	[haa kinna (井戸よりは)	[abu kinna (洞窟よりは)
[B型]	[jaa kin]na (家よりは)	[jama kin]na (山よりは)
[C型]	funi kinna (舟よりは)	nabi kinna (鍋よりは)

しかしいったいなぜ、2モーラ名詞に、全体として3モーラの助詞連続を後続させた(37)のような場合に、この体系の3種類の型の区別がもっとも明瞭に現れるの



だろうか。これまで謎に包まれていたこの問題に対する解答も、PWd という韻律単位をこの方言に想定することによって得られることを、本稿では論じた。すなわち、黒島方言の三型アクセント体系の仕組みを解明するための鍵も、(1) で示したような韻律範疇を想定することにある。

以上、本稿では、八重山諸島の黒島にも、宮古諸島と同様に、PWd という韻律範疇を想定することによって、この方言のアクセントのいくつかの記述上の課題に対する解答が得られることを論じてきた。

さて、日本語の諸方言、および北琉球（奄美・沖縄諸島）の多くの方言では、これまで、「モーラ、音節、フット」というような韻律範疇を用いることによって、そのアクセントの記述ができてきた。つまり、南琉球（宮古・八重山諸島）以外の日本語や琉球語の諸体系には、本稿の(1)に示されたような韻律範疇を想定しなければその仕組みが説明できない、というような体系は、これまでに報告がない<sup>20</sup>。したがって、このような韻律範疇がそのアクセント型の決定に関与している言語体系が日琉語の中にあらたに発見された、という事実は、類型論的観点から見ても意義深い。

さらにここで強調すべきは、この(1)に示された韻律範疇は、宮古・八重山諸島に共通して存在している可能性が、ここで見えてきた点である。このような見通しは、琉球語アクセント研究史を大きく塗り替える試みの出発点となり得る、と言っても過言ではない。松森（2015, 2016a）は、この韻律範疇は、宮古・八重山の諸方言が分岐・独立して現在の姿に至るより前の段階（すなわち宮古・八重山祖語の段階）で、その祖体系にすでに存在していた、という通時的仮説を提示した。（紙幅の関係上、この仮説の詳細についてはここでは触れることができない。）そのことを前提とするならば、この韻律範疇が、今も依然としてそのアクセント型の決定に関与している体系が、同じ南琉球（宮古・八重山諸島）の他の地域にも、今後あらたに発見されたとしても不思議ではない。

このことと連動し、八重山諸島のアクセント記述研究も、ここで飛躍的進展を遂げる可能性が開けてきたと言えよう。平山・大島・中本（1967）、平山（編著）（1983, 1988）、崎村（2006）等、これまでの主要な八重山諸島アクセントの記述研究によれば、（与那国島、および西表島の一部以外の）八重山諸島は、「二型アクセント体系」が大勢を占める、と考えられてきた。しかし、本稿でPWdと呼んで提示した韻律範疇を想定することにより、従来われわれが見過ごしていた「三型アクセント体系」

<sup>20</sup> 北琉球（奄美・沖縄本島）の三型アクセント体系の発見に比べ、南琉球（宮古・八重山諸島）の三型アクセント体系の発見は大幅に遅れをとったが、私見ではその原因は、まさにこの点にある。多くの南琉球の諸方言のアクセントの仕組みを正確に捉えて記述するには、おそらく、本稿の(1)に示したような韻律範疇の想定が不可欠だったのではないだろうか。それにもかかわらず、（少なくともこれまでは）われわれ日琉語のアクセント研究者の側に、この韻律範疇に関する正確な理解が欠けていた。これまで、宮古・八重山諸島の三型アクセント体系、およびその仕組みについて正しく把握することが困難だったこと背景には、以上のような事情があると思われる。

が、八重山諸島において、これまで考えられている以上に広範囲にわたって分布していることが、今後、明らかにされていく可能性が高い。それとともに、(たとえば、本稿の第2節および第3節で問題提起した黒島方言の原因不明な型の交替現象のように) 長いあいだ謎のまま残されていた八重山諸島の諸方言の韻律の仕組みについても、それを解明するための手がかりが、ここにきてようやく得られてきた、と言えるだろう。

## 参 照 文 献

- 平山輝男 (編著) (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』 東京: 桜楓社。  
 平山輝男 (編著) (1988) 『南琉球の方言基礎語彙』 東京: 桜楓社。  
 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』 東京: 桜楓社。  
 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文学研究』 8: 1-42. 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座。  
 五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ベラルー トマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』 16(1): 134-148。  
 Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi and Tomoyuki Kubo (forthcoming) Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. In: Kubozono, Haruo and Mikio Giriko (eds.) *Tonal change and neutralization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.  
 松森晶子 (2000) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から—」『音声研究』 4(1): 61-71。  
 松森晶子 (2010) 「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 (監修) 『日本語研究の12章』 490-503. 東京: 明治書院。  
 松森晶子 (2012) 「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』 16(1): 30-40。  
 松森晶子 (2013) 「宮古島における3型アクセント体系の発見—与那覇方言の場合—」『国立国語研究所論集』 6: 67-92。  
 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』 63: 13-36。  
 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント—その韻律単位に関する考察—」『日本女子大学紀要 文学部』 64: 55-92。  
 松森晶子 (2016a) 「声調言語としての宮古祖語—特にそのTBUとして機能する韻律上の単位について」田窪行則・ホイットマン ジョン・平子達也 (編) (2016) 『琉球諸語と古代日本語—日琉祖語の再建にむけて』 145-165. 東京: くろしお出版。  
 松森晶子 (2016b) 「多良間島における文のプロソディー—韻律句が連なる場合の音調交替現象について」国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」キックオフワークショップ口頭発表。国立国語研究所, 2016年1月11日。  
 松森晶子・五十嵐陽介 (2014) 「多良間島アクセントの仕組みとその類型論的意義」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」共同研究会口頭発表。神戸大学, 2014年6月22日。  
 ローレンス ウェイン (2000) 「子音を越えて起こる母音の融合—琉球諸方言における現象を中心に—」『音声研究』 4(1): 55-60。  
 崎村弘文 (2006) 『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』 東京: 明治書院。

執筆者連絡先:

[受領日 2016年3月2日

〒112-8681

最終原稿受理日 2016年8月17日]

東京都文京区目白台2丁目8番1号

日本女子大学文学部

e-mail: matumori@fc.jwu.ac.jp

**Abstract****A Prosodic Category PwD in the Accentual System of Kuroshima  
in the Yaeyama Archipelago and the Condition for Its H-tone Realization**

AKIKO MATSUMORI  
*Japan Women's University*

Focusing on the dialect of Kuroshima in the Yaeyama archipelago in the Ryukyus, this study attempts to clarify its accentual system. The dialect exhibits apparently unaccountable accentual alternations, the cause of which has not been elucidated. This paper shows that the assumption of a prosodic category “Prosodic (Phonological) Word (PwD)”, which has also been shown to function in assigning accents in dialects such as Tarama-jima or Ikema-jima in the Miyako archipelago, is indispensable in solving the question of why such alternations exist in the dialect of Kuroshima. Moreover, it is demonstrated that, contrary to previous studies describing it as consisting of two accentual patterns, the dialect actually has a three-pattern accentual system. Furthermore, the paper shows that PwD is also necessary in explaining why the three-pattern accentual system only appears under certain conditions in this dialect.